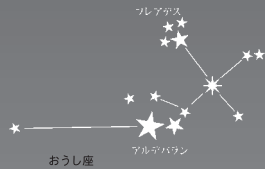


ポラリスを仰ぐ北の大地から



北極星

Web 開催

渡島医師会 会長 ^{こうせん} 光 ^{けんぞう} 銭 健三

新型コロナウイルスの感染拡大以降、学会や講演会などさまざまな集まりがWeb開催になった。個人的には日本内科学会、日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会等々、毎年出席していた学会がWeb参加となってしまった。学会会場へ出かけると同門の医師に会って懐かしい話しをしたり情報交換ができたのだが、それができなくなった。

また会場の医療機器展示も、実際に見て担当者に話しを聞いて情報を得ることができ、私のような地方の医師にとっては大変貴重だったが残念である。

ただWeb開催の利点が全くないというわけではない。大きな学会では同時に10ヵ所以上の会場で発表が行われており、もちろん現場ではどれか1ヵ所しか参加はできないのだが、オンデマンド配信をしている場合は、後日どの会場の発表でも何度でも聴講することができるし、現場では見づらいスライドをいったん停止してじっくり見ることができる。しかも休診にして出かけなくても自分の都合に合わせていつでも見られる。Web開催の利点はこれである。この2年間でWeb参加に慣れてしまったので、この先ずっとこのままでもいいか、と思うようになったが、日常のストレスから離れて都会のホテルに泊まるというリラックスした時間も捨て難い。

さて医師会の会合については、定例の常任理事会はホテルの広い部屋で感染予防をしながら開催しているが、大勢が集まる会議や講演会はやむなく中止したのもあった。渡島医師会は1市9町を担当しており、事務局がある函館市から両端の町まではそれぞれ100Km程度離れている。もちろん会議は従来通り顔を合わせて行うのがベストではあるが、遠方の会員の利便性を考えると、コロナ禍でなくても今後はWeb併用のハイブリッド開催が良いのではないだろうか。現在機材等準備を進めているところである。

頭の体操

北部檜山医師会 会長 ^{かわぎし} 川岸 ^{なおき} 直樹

本稿の原稿依頼を受けましたが、内容は「なんでも良い」とあり、かえって何を書こうか思案することになりました。これまで、内容を規定され専門知識で取りあえずこなしてきた者にとって、少しハードルが高い原稿依頼となりました。立場上、所属医師会の現状を踏まえて「コロナ」「医療過疎」「働き方改革」などをコメントしても良かったのですが、これらはバックナンバーにあふれていたもので、あえて違うコメントにしました。

今金町に来る前は、MRなどとは無縁の土地で、年に1、2回学会参加することでキャッチアップするのだろうと思っていました。しかし、赴任して驚いたのですが頻りにMRは最新の薬剤情報を持ってきますし、コロナになってからはweb講演会が毎日あり、専門医の更新も当地に居ながらできてしまっています。過疎地域でも、何不自由なく医学情報を受けることができる状況ですが、逆に発信する方はどうでしょうか。地域コホート研究の一端を担えれば、大迫研究などの様なcutting edgeの臨床研究となるのですが、当地域には存在しません。しかし、「遠隔地」「過疎地域」「小規模病院」などのキーワードを付せば、論文の題材はいくらでも転がっています。ただ、万人に裨益するようなものではなく、著者の「頭の体操」のための論文です。昨年は書かなかったので、保険外の検査をした症例報告を、査読があるという病院誌へ先日submitしました。年齢を重ねると査読で絞られるのはしんどいのですが、今でも英文誌のrefereeを月1でやっているのとお互い様でしょうか。来年も書くテーマがあるので、大学時代の「癖」はしばらく続きそうです。「頭の体操」を続けていけば、後継者となる若い医者が目も遠隔地に向いてくれるのではと期待しています。

